

欲しい

北崎勇帆

1 はじめに

人に何かをお願いするとき、典型的には動詞や補助動詞の命令形が用いられるが、特に話者の希望を表す場合に、(2)のように形容詞や補助形容詞、形容詞型の助動詞が使われることがある。小稿では(2a)(2b)の「ホシイ」(諸語形を一括してこのように表記する)の歴史について考えたい。

- (1) a ラーメンをくれ。
b 餃子も出して下さい。
- (2) a チャーハンが欲しい。←作ろう／作って下さい。
b 唐揚げを出してほしい。←*作ろう／作って下さい。
c 替え玉を食べたい。←茹でよう／茹でて下さい。

「話し手自身による事態の成立を望む」タイプの希望を「願望」、「他者による事態の成立を望む」タイプの希望を「希求」として区別するとき、(2a)形容詞「欲しい」や(2c)助動詞「たい」は願望も希求もできるが、(2b)補助形容詞「てほしい」は希求に用いることしかできない。以降、特に願望と希求の領域における位置付けに注意しながら、「ホシイ」の語史を見ていこう。

2 ホシイの語史

「欲しい」の源流である「欲し」は、同源の動詞「欲る」と共に、上代に既に見られる。

- (3) 山背の久世の若子が欲しと「欲」言ふ我 あふさわ

に我を欲しと〔欲〕言ふ山背の久世

(万葉集卷一・二三六一 [10:万葉 0759_00011,3990])

現代の(2a)「欲しい」と同様の用法であるが、体言を対象として事物が「欲しい」と望む例は(3)以外には見られない(注二)。事物が「欲しい」ことを表す場合には、主に終助詞「もが(も)」が用いられる。他の「欲しい」の例は全て、連語「まくほし」(助動詞「む」のク語法「まく」+「欲し」)、「動詞(+が)+ほし」や「ほしきまにまに」といった構造によって、話者自身の動作に対する願望を表す。



(4) a 紅に衣染めまく欲しけども「雖欲」[「染めたいけれど」]着てにほはばか人の知るべき

(万葉集卷七・一二九七 [10:万葉 0759_00007,60020])

b かにかくに欲しきまにまに「やりたいうに」

(万葉集卷五・八〇〇 [10:万葉 0759_00005,5160])

この例がそうであるように、古代語の「欲し」は節末以外の場所で使われることが多い。節末で動作の願望を表す場合には終助詞「な」「てしか(も)」などが用いられ、分布は「欲し」と対照的である(注三)。この「欲し」はその後、「まくほし」の後身である助動詞「まほし」と

交替し、「まほし」もまた

中世後期には「たし」にその座を譲る。成立当初の

「たし」は「まほし」同様、

節末以外に出現位置が偏

り、節末では主に終助詞

「ばや」が用いられたが、

中世後期には「たい」が(2c)

のように主文末でも盛ん

に用いられるようになり、

現代に至る(表一)(注三)。

事物の存在を「欲しい」

と望む場合も右の動作の

願望と並行的で、節末において(5a)終助詞「もがな」が用

いられる一方で、「欲し」は(5b)連体修飾節や(5c)否定など

の、終助詞では表すことのできない領域に偏る。(5c)は「父

母具したらむをほし」とならない点、示唆的である。



(5) a <いま人ひとりもがな>と思ふに、

(落窪物語卷一 [20:落窪 0986_00001,176350])

b ほしき物ぞおはすらむ

(土左日記 [20:土佐 0934_00001,93270])

表1 動作の願望と「ホシイ」

	終助詞	欲し		まほし		たし	
		文末	非文末	文末	非文末	文末	非文末
上代	73	6	40				
中古	228		8	59	348		
中世	前期	104		16	48		26
	後期	115		1	4	155	178

c 今めかしく好もしきこともほしからず、おぼえもほしからず、父母具したらむをともおぼえず。

(落窪物語巻二「20・落窪 0986_00002,258670」)

中世以降、終助詞「もがな」は依然として用いられるが、その衰退と表裏する形で、「ホシイ」は徐々に節末へと侵出していく(表二)^(注四)

(6) a 神ノナニガホシイカガ欲シイト云コトヲヤガ

テ天子ヘ言シテ、^(史記抄・孝武本紀「1477」)

b 京カラ一人ホシイト請ゾ。^(蒙求抄卷六「1529」)

補助形容詞「(て)ほしい」が出現するのは近世初期であり、成立時においても既に現代語の用法と差異がない(湯澤一九三六・二二三頁)^(注五)。この段階に至って「ホシ

表2 事物の希求と「ホシイ」

	終助詞	欲し	
		文末	非文末
上代	102	2	
中古	98	2	17
中世	前期	27	43
	後期	4	33
近世	前期	2	10
	後期		13

イ」は、それまで終助詞「なむ」や命令形(十終助詞「かし」)が担っていた、「他者の動作に対する希求」にまで、そ

の領域を広げることとなる。

(8) とてもの事に、べんをつけてほしや、

(昨日は今日の物語・整版九行本「1636刊」)

3 おわりに

以上、コーパスを活用した語史研究の一環として「ホシイ」の語史について扱った。終助詞から、助動詞「たい」、形容詞「欲しい」、補助形容詞「てほしい」のそれぞれへの移行は、願望や希求といった話者による希望の表出を、いわゆる喚体句(やそれに近い非述定文)によって表現する体系から、述体句によって表現する体系への移行という流れとして理解されるだろう。

注

- 仁科(二〇一八・五九五)は、基本的には願望を表すとされる「てしか(も)」に希求の違例が存することに基つき、「てしか(も)」が「希望全般に開かれたものであった」と捉える。稿者の「欲しい」についての理解もこれに近い。
- 上代の「欲し」の引用節末の出現が稀であることは田中(一

九九八)に、上代における「まくほし」や源氏の「まほし」の出現位置が従属節や連体修飾節内に偏り、句末にほぼ現れないことは釘貫(二〇一八)に指摘がある。

- 3 表一・二内の数値は『日本語歴史コーパス』で収集した用例に限る。狂言は韻文・手紙の例を除き、江戸時代編は会話文のみを対象とした。表一の「終助詞」は「な」類、「しか」類、「ばや」、表二の「終助詞」は「もが」類をまとめて集計してある。
- 4 大蔵流狂言台本の対照から推測するに、交替の時期は近世中期頃であろうか。

・只今ひとり事にも、よひつれもがなど申て御ざるが、
(虎明本・餅酒 [40・虎明 1642_01006;6650])
・やれく、よいつれもがな、同道致度。
(伊藤源之丞本・三人夫 [1751-1763 頃写])

・唯今も独り言に、能連がなほしいと申て御ざる。

(虎寛本・三人夫 [1792 写])

- 5 安(二〇一〇)は「てほしい」の依頼の用法が後発的なものであるとするが、素材の「欲しい」が(6b)のように既に対者的用法を備えているので、成立当初から依頼に用いることができたと考えてよいように思う。その後の「てほしい」の使用の拡大については工藤(一九七九)に詳しい。



使用資料

国立国語研究所(二〇一九)『日本語歴史コーパス』(バージョン2019.3, 中納言バージョン 2.4.2, 近松は内部データを使用)、『史記桃源抄の研究』日本学術振興会、『抄物資料集成 蒙求抄』清文堂(史記抄・蒙求抄の検索は住谷芳幸氏作成テキストデータによる)、『宮島大蔵流狂言台本 伊藤源之丞本』米子工業専門学校国語研究室、『大蔵虎寛本 能狂言』岩波書店、『噺本大系』東京堂書店(国文学研究資料館「噺本大系本文データベース」による)

参考文献

安志英(二〇一〇)「要求・依頼を表す複合辞「くてほしい」の通時的研究」『日本學報』八四)

釘貫亨(二〇一八)「奈良時代語における話者願望マクホシをめぐる通時的諸相」『国語語彙史の研究』三七)

工藤真由美(一九七九)「依頼表現の発達」『国語と国文学』五六・一)

田中牧郎(一九九八)「欲シ・欲ルの意味分析―惜シとの対照を通して―」(佐藤武義編『万葉集の世界とその展開』白帝社)

仁科明(二〇一八)「ある」ことへの希望―万葉集の「もが(も)」と「てしか(も)」―(沖森卓也編『歴史言語学の射程』三省堂)

湯澤幸吉郎(一九三六)『徳川時代言語の研究 上方編』(刀江書院)

(きたざきゆうほ 高知大学講師)